

古文書と共に「十」

徳川家康の遺訓といえは「人の一生は重荷を負つて遠き道を行くがごとし、云々」が有名だが、これは偽書であるとして、歴史的価値が認められていない。では誰の作であるのか、それもはっきりしていない。しかし家康ならでは言えるに相応しい内容であり、文章もすべれているので、江戸時代には家康の言葉として疑いなく信じられていたのである。

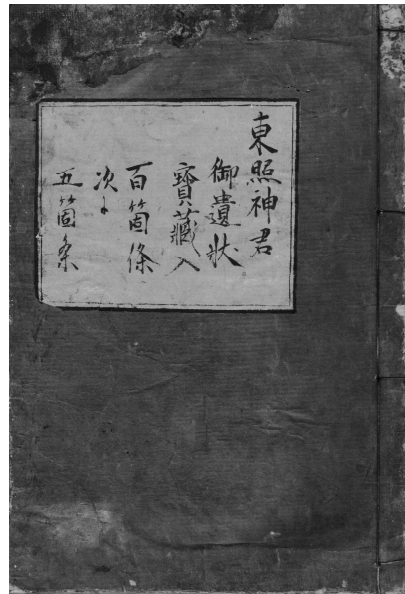
この写本『東照神宮御遺状』は安政四年に写し書かれている。元となる書物について菱田幸助という人物が宝暦元年に秘蔵されていた家康自筆の百箇条を写したとの添書きがある。この百箇条も実は偽書であることが定説になっている。後半に台徳院（秀忠）の御台所へ送った手紙の内容が記されている。「人の一生は」の有名な遺訓はその冒頭に載せられている。宝暦以後に表向きには出せなかったであろうが、徳川家臣の必読書として密かに写し継がれてきたものと思われる。

実は家康が直接書き残した遺訓はないのだが、なぜ家康の言行が潤色され数々の教訓が作られ伝えられてきたのだろうか。それは家康の思想を理想的に考える崇拜者がいて、このような偽書を生み出し、聖典として扱われてきたのである。これは宗教ともいえるので、私なりの考察を後に述べてみたい。

著作の真偽は別として当時家康の教訓として認められていた歴史的背景を知る上での古文書として位置づけられてよいだろう。知名度が高いので初学者の古文書のテキストとしてもおもしろいのではないだろうか。

表紙

写本ではあるが糸綴じ製本されており、題箋も手書きで付けられている。



最終頁にこれを写した日付および人物が書かれている。

お及  
丁巳七月吉日  
文周

安政四年

丁巳七月吉日

文周？(花押)

家康の遺訓といえばまず思い浮かべるのがこれである。実は全くの創作であるが、偽作と断定されても家康の人世訓として今に語り継がれている。

東照神君御遺教

人の一生は重荷を負て遠き道を行かば急ぐ  
處は不自由を常と思へ不足ありんば  
なほ積り困窮の老と云ふは堪忍は  
長久の基は相好は徳と云ふは徳を  
負ふ事と云ふは徳を言はる事と云ふ  
事人を知る事と云ふは事を知る事  
より増す事

東照神君御遺教

人の一生は重荷を負て遠き道を行がごとし、急ぐ  
へからず、不自由を常と思へ不足なし、心に望発る  
ならハ、我より困窮の者を思ふへし、堪忍ハ無事  
長久の基ひ、物好ミハ敵と思へ、勝事計りを知て、  
負る事をしらすハ、其身を害するに至る、唯己を  
責て人を改るな、何事も及さる事過たる  
より増るぞかし

「人の一生は重荷を負って遠き道をゆくがごとし」、「不自由を常と思へば不足なし」の文言は特に人口に膾炙している有名なすぎるほどの人生訓である。それはとりもなおさず、家康の一生がその言葉通りであったがゆえに遺訓の価値は増幅していったといってもよい。

しかし、実は全く後世の創作なのである。全くの創作であるにもかかわらず、各東照宮に真筆がおかれ複製が頒布されて「家康の遺訓」として人々に浸透しているところに、またこの遺訓の価値があるのである。

「偽物」とは意味がちがうのである。製作する側がニセ物として普及させても、受けとめる側の人々の意識が拒否するならば所詮どこまでもニセ物であるが、家康の場合はむしろけとめる側の家康讚美が、かえって理想的人生訓を作りあげていたのであり、いわば、歴史における思想の所産とも云うべきものである。 (『戦国武将の家訓』佐藤和夫著)

また徳川宗家の子孫で徳川美術館の館長でもある徳川義宣氏の研究によるとこれは徳川光圀の訓として伝えられた一文が幕末になって家康の遺訓として世に広まったとのことである。各所にある家康自筆の遺訓は明治になって贋作されたことまで調べられている。家康の文面としては幕末からのことだが、少なくとも安政四年にはあったことをこの写本が語っている。

私はこれを仏典でいえば般若心経と同じ目的で成立したと思っている。膨大な量の経典は理解しがたいところから発生したのが般若心経であるが、これも家康の遺訓を簡潔に理解するために創作されたものであろう。

御遺状宝蔵入百箇条

添書きには、月番の老中以外は見る事ができない秘書である。と書かれている。現在では偽書とされているが表題は違つが同じ内容の書物が数々出されている。

御遺状寶蔵入百箇條

- 一、先辭之所好專可啓己所嫌事
- 一、於鰥寡孤獨輩者尤可加憐是仁政為基致也
- 一、尊崇神祇琢磨心身生涯不可怠事
- 一、代世續無空時井伊本多酒井神原等之老臣令會合不依縁之遠近其器當者撰而相議而可相定事
- 一、征夷將軍宣下之法式者鎌倉殿以例日本國中知行之惣高貳十八百十萬石之内二十萬石令配當忠勤之本名八百萬石之和行之所備禁裏之敬警衛而撫四隅事

(漢文調なので口語訳にした。)

御遺状宝蔵入百箇条

- 一、先ず己の好む所を避け専ら己の嫌う所を務むべき事
- 一、鰥寡孤独の輩に於いては尤も憐れみを加うるべし  
是れ仁政の基為る故也
- 一、神祇を尊崇し心身を琢磨するは生涯怠るべからざる事
- 一、代々世続これ無き時は井伊、本田、酒井、榊原等の老臣に会合せしめ縁の遠近に依らず、其の器に当る者を選びて相議し相定むべき事
- 一、征夷將軍宣下の法式は鎌倉殿を以て例とす、日本國中知行の惣高貳千八百十萬石の内貳千萬石を配當せしめ、忠勤の大小名へ八百萬石を知行す。禁裏の警衛に備え

右百箇條者

東照宮様御致御申上御筆之御條目納御宝蔵、御月番  
御老中ノ外御見舞ノ某者仕官致屋敷記書ノ阿久津  
依懇望写ノ親類兄弟之家たりとも御貸被成間敷候、御一  
代之秘書被思召、亦者某之形見ニ被思召被下候  
宝曆元年十一月中旬 菱田幸助龍 書

右秘書者公儀之思有之付他見堅停止大切御取持可被成候

右百箇條者

東照宮様於駿府御自筆之御條目納御宝蔵、御月番  
御老中ノ外御見舞ノ某者仕官致屋敷記書ノ阿久津  
依懇望写ノ親類兄弟之家たりとも御貸被成間敷候、御一  
代之秘書被思召、亦者某之形見ニ被思召被下候

宝曆元年十一月中旬 菱田幸助龍 書

右秘書者公儀之恐有之ニ付他見堅停止大切御取持可被成候

台徳院様之御台様江御文之写

「学問は唐の書ばかり見るにあらず、まづ第一に拝見すべきは、東照宮の御遺訓ならびに、同君より崇源院様(秀忠夫人への御文、且つ室鳩巢の駿台雑話、貝原篤信(益軒)が大和俗訓家道訓などの類、熊沢了海(蕃山)が集義和外の書、其外教訓の和書を見るべし」

羽太正義(まさやす)の家訓(『羽太家訓』(正義院家訓)卷之中)である。寛政七年(一七九五)の作である。正義は二百俵相当の旗本から布衣待遇千俵高の田安家人・西丸御目付・千石高の目付・蝦夷奉行などをとめた。

まづ第一に拝見すべきとされているもうひとつである崇源院様への御文がこの写本の後半に載せてある。子供の養育に関する教養書として必読の書であった。

また、第一とされているはじめの東照宮の御遺訓は「人の一生は」とは別のもので本編と附録があり、本編二十八条は家康の言行録、附録二十八条は秀忠・家光の言行録でなりたっている。御三家・諸大名らが蔵書した記録の残るバイブル的存在の『東照宮御遺訓』である。恐らくこの写本と同所にこれがあったのではないかと思われる。「上は將軍から下は平士に至るまで基本的に教訓として指導者階級の宝典」(『近世以降武家教訓の研究』近藤斉著)であった。しかし内容から偽書の疑いが高く、同氏により貝原益軒の作ではないかと推定されている。

一 筆申入候、日増ニ暖氣ニ成候而暮能候、其許無事若達も息才ニ候哉承り度候、旧年者ゆるゆる御目ニ懸り悦入候其節何角御面所御世話共老後之樂ニ候、宜表江も此段頼入候

一 竹千代国松殊之外成人悦入候、夫ニ付先頃其御地江參候節竹江之付人之事、被申付候様ニと申置候、定而被御申付一国事者一体殊之外発明なる生れ付ニ而重畳之事其元分て御秘蔵のよし左様可有事ニ候、夫故存寄申入候間よく御心得生立候様ニ可被成候



この六万遍日課念仏は慶長十七年（一六一二）四月一日にはじまり、十二月三日までの間であり、家康七十一歳のときに書かれたとされている。この手紙が真実であればそれ以降に書かれたものである。日課念仏は現物が残されており山岡鉄舟の鑑定書が添えられて重要美術品に認定されているが、これらは贋作であることが証明されている。

日課念仏が行われたことは『大樹寺帰敬録』・『松平啓運記』などに、晩年の家康が三河大樹寺の登誉上人に勧められたとの記事が見えるので事実である。ここにも家康の辛抱強い一面が現れていると言えよう。

ここで注意したいことは、山岡鉄舟の鑑定書の日付は明治十九年十月とあるようで、時代が落着きを見せ江戸を特に文化面で見直す余裕が出来てきた頃である。山岡鉄舟ら江戸を生きた文化人が復活しはじめたのである。

右之御文ハ忠

神君様駿河ニ被為 入候頃江戸江御成有之還御後  
急徳院様之御書様此道江御文ノ字様有之一度  
法皇社後世赤子ノ育方ニ能手本と申存

右之御文ハ乍恐

神君様駿河ニ被為 入候頃江戸江御成有之、還御後  
台徳院様之御台様江被 進候御文之写、縁有て一度  
拝見仕後世赤子ノ育方ニ能手本と申存

## 考察

壮麗な東照宮、権現様・東照大神君は、以後徳川三百年の象徴であり、家康の言行は直接間接に語り書き伝えられてゆくうちに、潤色され神祕化され、讚美のあまり創作までなされるようになってゆき、幕府政策の基本理念として「祖法」の名のもとに「権現様御捉のごとく」として、幕末まで日本の政治の動向を支配した。

(『戦国武将の家訓』佐藤和夫著)

ここで私は仏教における経典との類似点を指摘してみたい。経典は釈迦が行った説法を記録したものだ、釈迦自身が書いたものではない。釈迦の入滅後、弟子たちがそれぞれ「如是我聞」と前置きして書き記したものである。ここで潤色され神祕化され、讚美のあまり創作までなされるようになってきたものが経典である。

家康の聞書きされた教訓は仏教の経典と全く同じ成立過程を辿っている。家康も江戸時代は死後権現様という神として崇められていた。崇拜者により教訓がまとめられ、その際創作が含まれても当然である。ひとりの人物の思想が本人から離れて周囲の人物や社会の評価が加わり、新たな人物像が形成されていくのである。

釈迦よりは家康の実像を知る史料は多くあるが、これは思想面で家臣らが家康をどう見ていたかを知るよい教材である。私たちはこれらの形成過程を分析することで家康の実像を推測することができるのではないだろうか。釈迦の場合は経典のみが彼の実像を知る全てになってしまった。

明治維新に家康の神としての存在は否定され、徳川封建制時

代のものはみな忌み嫌い廃棄されてしまった。これらの書物も影響を受けて残存量は少なくなってしまうに違いない。また近代において偽書ということが判明して学術的な価値がないとしてさらに処分されたものも多いだろう。しかし本人の作かどうかで価値を決めるのではなく、思想文化的な面の資料として価値があるかどうかを考えるよう、改めて見直してみる必要があるのではないだろうか。偽書という用語があるかも知れないが仏教の経典が思想面での学術的価値があるように。